

オプション教材タラ 読解マラソン集



読解問題のもとになる長文です。読解問題をやる人は、時間のあるときに読んでおきましょう。

読解問題は、清書の週で時間があまったときにやってください。時間がないときは、やらなくていいです。

読解問題は、選択式問題の解答のコツをつかむために行います。適当に全問やるのではなく、一問か二問でもいいですから確実に正解にするつもりでやってください。

読解問題の答えを作文用紙に書く場合は、問題の番号と答えがわかるように書いてください。書き方は自由です。読解問題の用紙は返却しませんが、選んだ番号と正解は「山のたより」に表示されます。

読解マラソンの問題のページから答えを送信すると、その場で採点結果が表示されます。（この場合、作文用紙に答えを書く必要はありません）

▼作文用紙に答えを書く場合（書き方は自由です。
作文用紙の余白などに書いても結構です）

▼読解マラソンのページから答えを送信する場合（この場合作文用紙に答えを書く必要はありません）
<http://www.mori7.net/marason/ki.php>

1.

2.

3.

4.

5.

よく人からこんなことを聞かれます。

「どうして高い山へ登るんですか」

あの有名な登山家マロリーは、

「山がそこにあるから……」

と答えましたが、これはほんどうの気持ちではなかったようです。なんでも答えるのがめんどうくさくて、なにげなく冗談めかしてそういつたらしいのですが、それがいつのまにか名言となつて、それが通りことばとなったようです。

たしかに山がそこにあるから登るのでしようが、わたしはそここのころをもう少し掘り下げてみたくなりました。わたしは絵描きです。よく人が、

「なにもそんなに高いところへ登らなくても、もつと楽をして絵を描くようにすればいいのに」と、いつてくれます。でも、せつかくそう言つてくれても、やっぱり高いところへ登つてしまふのです。

では、どうして高いところへ登るのかという問題です。人にはそれぞれ自分なりに持っている、自分自身にたいする鍛え方というものがあるはず。たとえば体操をしたり、かけ足をしたり、大きな声で詩を吟じたり、いろいろその人なりの鍛え方があると思います。わたしの場合は、高いところへ登るためについてくるつらさというもの

を、わたしの鍛え方としたいのです。(中略)

なぜこんなにつらい思いをしてまで、おれは登るのか、たしかに自分でもそう思うことが始終です。そこで解答を出すわけなのですが、じつはそのつらさを体験するために登っているのです。自分の今の状態の限界を試してみ、そこで耐えられる自分の強さを知りたいのです。耐えられる強さは、なぜ自分はこうやつて生きているのか、という自分自身への解答になります。自分は絵を描くためにこうやつて生きてゆくんだという確かめが、はつきり形となつてとらえられるのです。これはわたし自身にとつて、とても大切なことなのです。そこで、みなさんの大好きな野球を例にとつてみましょう。たとえば、個人ノック。

はじめのうちは、たいていけっこうよくボールを捕っていますが、そのうち五十本になり百本ともなつてくると、どうなるでしょう。足はもつれ声も出なくなつてきませんか。

「さあ、こい」なんていつてますが、からだは球についてゆきません。百五十本近くになりました。そんな時、もうとても周囲のことなどに気をとられている余裕などありません。ふとそこには自分もなにもない、心がからつぽになつてしまふ時があるのです。と、ノッカーから打たれた球は、自然と君のグローブに吸い込まれてくるはず

です。「やったあ……」そこには、できると思つてもいなかったものをつかみとつた、じつにすばらしい感動が生まれてきているのです。なにかもわからなくなつた時、向こうから飛び込んでくるもの、心もからだもくたくたになつた時とらえられるもの、これこそわたしの求めていたものなのです。そうです、わたしの場合はそれを山に向かつてしているのです。おわかりになつてくれたでしょうか。

そして、もう一つの解答もあります。

それは高いところに登つた結果得られる、「白と黒」の世界を描きたいという願いです。わたしたちを取りまく世界には、たくさん色ががあります。ところが、そんな色がだんだんと高みに登るにつれて消去されていく、そんなこと、ご存じでしょうか。そしてついには花もなく樹木もなく、白い雪と黒い岩石に凝結されてくる、そんな自然を描きたいばかりに高みへ登つてゆくのです、つまり白と黒の世界、そんな世界を捜し求めているのです。

そして高みに登つた果てに、その向こうに見えてくる世界を望むことができます、そんな喜びもあわせ持つことができるのです。どうか、そういうものを与えてくれる山はすばらしいと思いませんか。みなさんも、ぜひ山へのあこがれを持つてください。

(山田寿男「山のスケッチだより」)



さて、いろいろな点で勉強のやり方にくふうをしなければならい
 と思っっているひとにいつておこう。勉強法はなるべく簡単なほうが
 いということだ。複雑に考えてやったことにいい成果は出ないとい
 のがわたしの意見だ。勉強の目的は各人によってちがうものの、何か
 目標を決め、知りたいことを解くという目的であつたら、シンプル
 なほうがいい。「学問に王道はない」ということわざがあるように、
 勉強にバイパスはないのだ。ひとつひとつを手前からやっていかな
 いとい結論は出ない。わからないコトはわからないコトとしてすて
 るのではなく、もちつづけることなのだ。

たとえばわたしはエジプト考古学を専攻している。そこではいくつ
 も大きな疑問が出る。(中略)

今から二十年近く前に、五センチくらいの象牙の棒と石製の化粧板
 が遺跡から出た。化粧板はすぐわかつたのだが、象牙の棒については
 わからなかつた。そこで教授クラスのひとが、「ヘアピンだ」とい
 いきつたものだから、遺物台帳にそう書きこまれてしまった。わたし
 は「ヘアピン」というのに疑問をもつたが、当時は学生だったので
 教授に異論をはさむ立場でなかつたし、といって、はつきりなんだ
 と反論する説も、もちあわせていなかったたのでその場はだまつてい
 た。

あるときシナイ半島のベドウィン(遊牧民)の家族のテントをおと
 ずれたとき同じようなかたちのもを見た。ただし木製であつた。そ
 こでカイロ大学の友人のお母さんがその木製の棒の持ち主だつたの
 で、聞いてもらった。答えは「マスカラ」であつた。その棒と対に
 なつてゐるピンも見せてくれた。平らな皿にすみを流して使うことも
 あると聞いたとき、わたしたちが発見した象牙の棒が、ヘアピンでな
 くマスカラであることを予感した。

さつそくカイロに帰つて博物館に行つて、すみからすみまでさがし
 たところ、象牙のマスカラを発見することができた。はじめから
 博物館をたずねて調べればよかつたのだが、教授という権威がいつ
 た「ヘアピン」という言葉の重みで、そこまでできなかったのだであ
 る。

33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 09 08 07 06 05 04 03 02 01

この例は、すぐに思いつきで何かを判断しないほうがいいといこ
 とと、すててさえなければいつの日か解けるときがくるということの
 証である。これ以外にもこうした例はたくさんある。勉強のやり方
 でいちばん大切なことは、勉強するひとなりに独自のやり方を考え出
 し、それを守ることだろう。(中略)

勉強と聞くとき身ぶるいするひともいると思うが、その発想をかせ
 ないとだめだと思ふ。勉強は楽しいはずだと思ふことがその第一歩と
 なる。よく考えてみると、人間しか勉強をしない。ということは、勉
 強は人間の特権であるとともに人間の証でもある。それならば積極
 的にとりくまなければ損だ。

勉強は子どものときで終わりだと思つてゐるひとは少なくないと思
 う。少なくとも大学を卒業したときに終わつたと思つてゐるだろ
 うが、そうではない。人生は死ぬまで勉強がつづくのである。(中略)

わたしは大学で教えたり、研究調査をしている大学人なので、社会
 人としての自覚はないが、友人の社会人はわたし以上に勉強してい
 る。往復の電車のなかで人生論の本を読み自分の人生を豊かにし、会
 社では日々ひとと会つて勉強をしているという。こういう前向き
 とは生きていても毎日が楽しいことだろう。休日は電車に乗つて山へ
 行き、森林浴をしたり、木や草を見ながら自然のすばらしさにふれ
 る。夜は山小屋にとまり、夜空を見上げ、星たちをながめることで
 宇宙の神秘を想う。なんと楽しい人生を送つてゐることだ。
 こんな人生を送れるというのも、子どもころから勉強を苦とせ
 ず、楽しいものと考えていたからである。

成績がいいとか、悪いとかではなく、自分の好きなコトを見つけ、
 それを勉強していると、しぜんとほかのコトもついてくるのだ。

(吉村作治「好きなことを勉強する楽しみ」)



66 65 64 63 62 61 60 59 58 57 56 55 54 53 52 51 50 49 48 47 46 45 44 43 42 41 40 39 38 37 36 35 34

私たちは東京に住むと東京の生活一色になってしましますが、そうでなくて田舎に行く。観光地に行ったり、盆のときにバーツと行くのではなく、そこで二週間ぐらい昼寝したり、そこでとれるものを食べたり、いっしょに畑をやってみたりする。いちばん子どもにとつてだいじなのは、動物が生まれるところをみせる、死ぬところをみせることです。あるいは自分がかを植えて、それが一日一日と大きくなって、やがてそれが刈り取られて死ぬところをみせる。そうやって人間が自然のなかの一部であり、自然とどう付き合っていくかがだいじだということを教えないといけません。そういうことを学者ふうにいいますと「農業の教育力」といいます。これはルソーの言葉です。農業は教育力があるのです。

そうした教育力が工業になぜないかといいますと、現代の工業は産業システムのなかの一部分しか一人の人が担当しないからです。

たとえば一人の人が鉱山から鉄を掘るところからはじまって、あるいはそこまですべての部品を組み立てて車をつくっていくとするなら、これはおそらくすばらしい体験になると思います。でも、それは許されない。流れ作業とかの産業システムのなかの一部分だけ、ただいつも同じボルトを締めているしかないのです。そうすると、自分でなにかをつくったという体験にならない。

誰でも経験があると思いますが、何か自分でものをつくるとしますね。頭のなかにそのつくるものをイメージする、やってみる、うまくいかない、がつくりくる。でも、この次ががんばってやってみる。そのくりかえしのうえにできたときにすごい喜びがあります。それとおなじように、こしはこの畑になにをまこう、あるいは牛を育てよう。そういうふうな仕事というのは、まずゴールがイメージできて、自分の力でそれにいっしょうけんめい近づいていき、それを達成したときには喜びがあるというのが、仕事のいちばんだいじなところだと思います。

ところが、不幸にして、現代の工業システム、産業システムは、人間からそういう仕事の喜びを奪ってしまう。試行錯誤をしたり、考えこんだりしているヒマがあったら、はやく、たくさん、同

じものをつくらなければ効率が悪い、競争に負けるというのが、現代の工業の考え方です。自分のやっていることの意味が全体のなかでわからないから面白くない。ところが、農村にいくと全体が身をもつてみえるのです。

工業が自然を破壊してしまうのも、これと関係があると思います。私は、工場や商社に勤めている人がみんな環境破壊をしようと思っているなどとは思いません。しかし、工業のシステムに入ってしまうと、自分のやっていることが地球のなかでどんな意味をもっているのかわからない。自分が締めているネジが、自分が使っている薬品が、どんな影響を地球に与えるかなどというのは、流れ作業のなかではまったくみえてこない。それで、知らず知らずのうちに、地球をこわしてしまっているのです。

(中略)

農業はいまや日本のGNP(国民総生産)の二%ぐらいしかないからもう要らないというのが産業界の意見ですが、そうではないのです。それはコメやなんかの値段だけ。値段だけを比べてほしくない。その陰になつていっているものを認めなければならぬ時代がきたのです。それは経済性を追わないという時代でもあります。追わないことがかえって利益になる。即座には利益になりませんが、あとあとそれが利益となって帰ってくるのです。

(井上ひさし「続 井上ひさしのコメ講座」)



れんじつ
連日の梅雨空です。いまも雨こそふつてはいませんが、空は、むらなく、うすいグレー一色にぬりつぶされています。

「おーい、美奈代！」

男の子の声がとんできました。運動場をまっすぐにつつきつけてかけてくるのは、となりのクラスの

岩田勇。赤ゴリラというあだ名そのままの体形で、リンゴのような赤いほつぺたが近づいてきます。

美奈代と菊菜は、べつにふりむきもせず校門にかかりました。

「美奈代、美奈代！ おまえを呼んだんだぞ！」

勇は、息をはずませながら、

「呼ばれたら、立ち、どまるとか——へ、返事を、する、とか、しろ。美奈代。」

「気やすく呼ばないでね。」と、美奈代は、そっけなく、「で、なんの用？」

「まず、こつちを、見なよ。」

と、勇は、ふざけました。

「相手にしない、しない。」

と、菊菜が美奈代に注意しました。

「三枝さん、そういういい方って失礼だと思えますよ。」勇は、わざとじろりと菊菜をにらんでから、「うちの先生が呼んでるよ、

美奈代。うそじゃないから教室のほうを見なよ。」

美奈代は校舎をふりむきました。すると二階から南野先生が、たしかに手まねきをしていました。

「な、そうだろ。」

「キク、待ってて。」

美奈代は菊菜にいいのこして、運動場をかけもどりました。

（福永令三「クレヨン王国の赤トンボ」



33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 09 08 07 06 05 04 03 02 01



自由が丘の駅で、大井町線から降りると、ママは、トットちゃんの手をひっぱって、改札口を出ようとした。トットちゃんは、それまで、あまり電車に乗ったことがなかったから、大切に握っていた切符をあげちゃうのは、もったいないなと思った。そこで、改札口のおじさんに、

「この切符、もらっちゃいけない？」
と聞いた。おじさんは、

「ダメだよ」

というど、トットちゃんの手から、切符を取りあげた。トットちゃんは、改札口の箱にいつぱい溜っている切符をさして聞いた。
「これ、全部、おじさんの？」

おじさんは、他の出ていく人の切符をひったくりながら答えた。
「おじさんのじゃないよ、駅のだから」

「へーえ……」

トットちゃんは、未練がましく、箱をのぞきこみながらいった。
「私、大人になったら、切符を売る人になろうと思うわ」

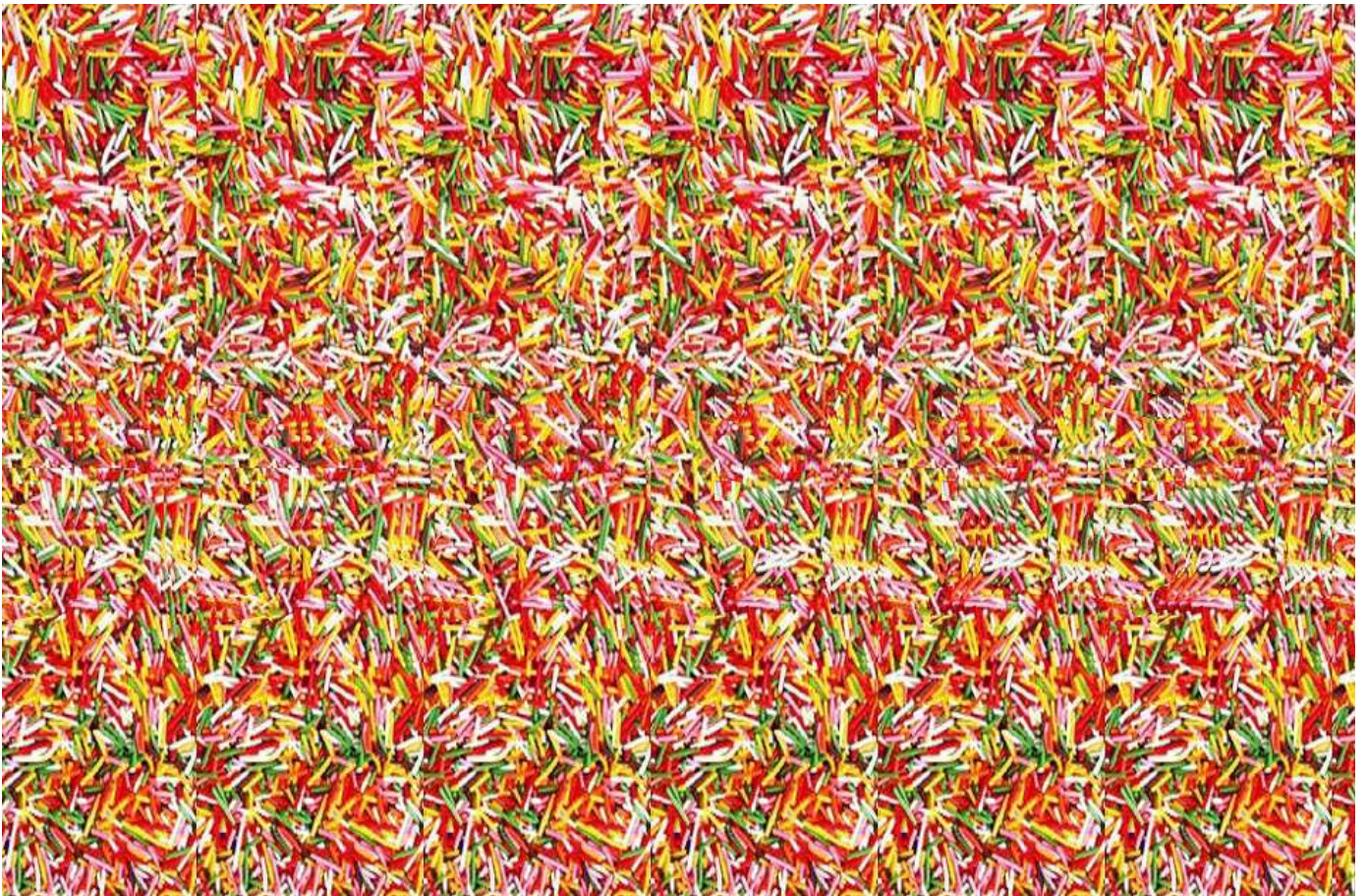
おじさんは、はじめて、トットちゃんをチラリと見て、いった。
「うちの男の子も、駅で働きたいって、いつているから、一緒にやる
といいよ」

トットちゃんは、少し離れて、おじさんを見た。おじさんは肥つていて、眼鏡をかけていて、よく見ると、やさしそうなのところもあった。

（黒柳徹子「窓ぎわのトットちゃん」）



33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 09 08 07 06 05 04 03 02 01



アフリカのみどりの森に、あかるい朝がやってきたのに、ヒヨウのとうさんは、げんきがありません。むすこのペポネのおをみては、しんばいそうに、くびをかしげています。そして、かあさんとかおをみあわせては、ためいきばかりついているのです。

ふたりがしんばいするのも、むりはない。ペポネには、ひげがちつともはえてこないのです。

ひげのないヒヨウなんて、アフリカじゅう、いや、世界じゅうさがしたって、みつからないにきまつています。

ペポネにひげがないことは、もちろん、うまれたときからわかつていました。しかし、なにしろ、うまれたてのあかんぼうのこと、そのうちにはえるさと、とうさんヒヨウは、気にもとめなかったのです。

ところが、いつまでたつても、はえてこない。これでは、うっかりそとへつれてあるけません。なかまたちに、からかわれるにちがいありませんからね。

かあさんヒヨウは、ペポネのはなのまわりを、ていねいに、なんどもなめてやりました。

ただだめ。

赤い月がジャングルの空にのぼる夜ごとに、かあさんヒヨウは、月にいのりました。

「どんなひよりとしたひげでも、けつこうです。どうか、はやしてやってください。」

しかし、やっぱりはえません。

とうさんヒヨウは、しかたなしに、森いちばんのものしりの大フクロウのところへ、そうだんにでかけました。

話をきいて、大フクロウは、ホッホツとわらいながらいいました。

「そうさな。こんな話はきいたことがないな。さすがのわしにも、けんとうがつかぬが……そうそう、おひげのあるさかなでもたべさせてはどうか。」

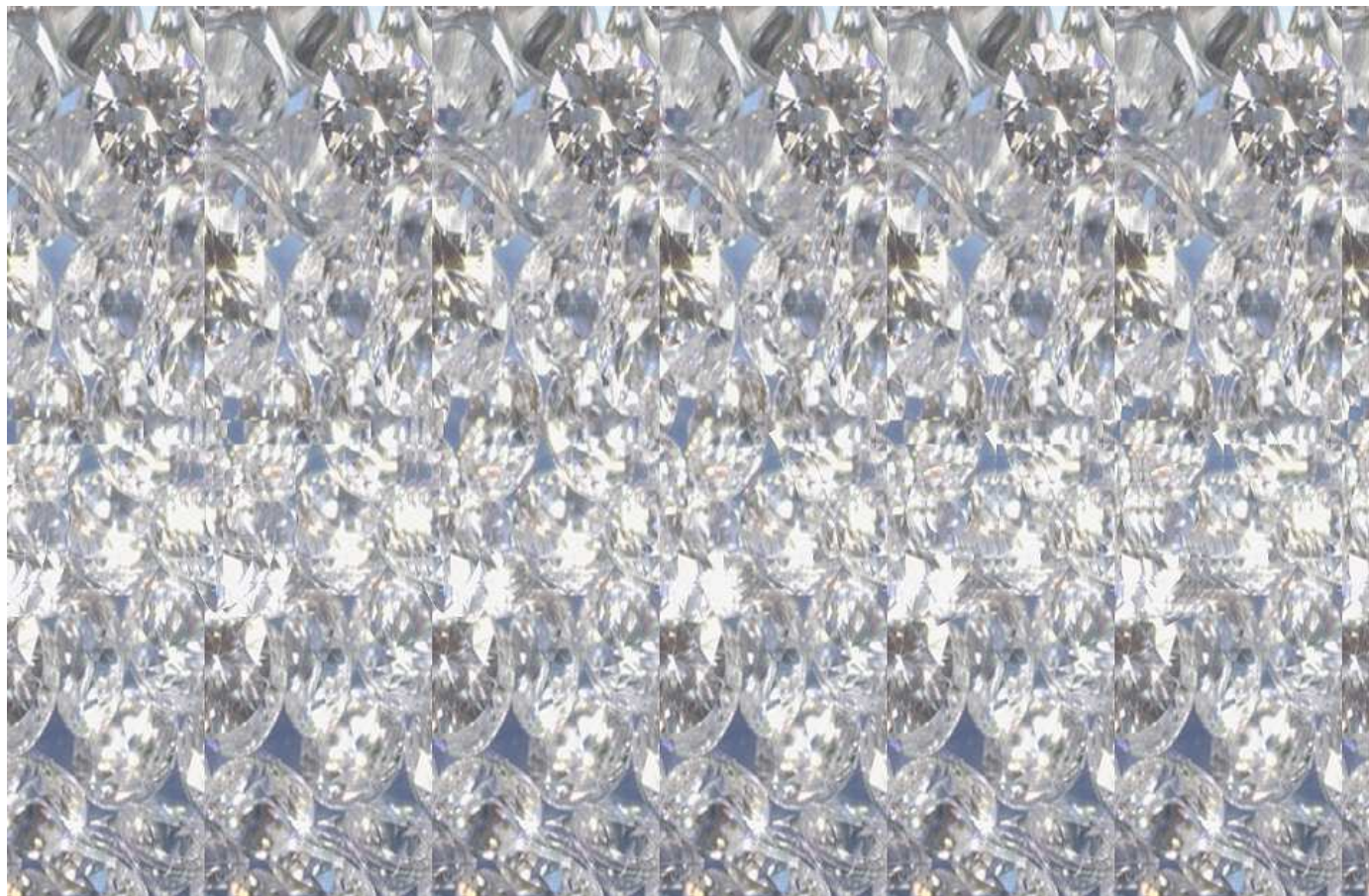
おぼれるものはワラをもつかむ、どんなことでもやってみようという気持ちです。とうさんヒヨウは、ジャングルの川へとんでいきました。めざすのは、もちろん大ナマズ。

(今江祥智「ちようちよむすび」)

こようしとむ



33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 09 08 07 06 05 04 03 02 01



ベランダに、一羽のハトが迷いこんだのは、二月末の夕方だった。
「おい、たつひこ、ハトがいるぞ。」

ぼくが自分の部屋で模型飛行機の修理をしているときに、居間の方からお父さんの声がした。

「ちよつと待っててよ。今、大事な所を接着しているんだから。」

ぼくは、水平尾翼の部分強く手でおさえてから、飛行機をゆつくりつくえの上においた。

お父さんが、窓からベランダの方をのぞいている。

「どうしたの。」

「ほら、あそこに……。」

ぼくは、お父さんの肩ごしに外を見た。

お父さんが指さす先には、灰色の翼に二本の黒い線の入ったハトが、ベランダのすみで頭を胴体にうめてうずくまっていた。

「動けないみたいだね。」

「レースの途中でつかれてしまったのかな？」
「レースって？」

「ああ、たくさんさんのハトを集めて遠くからいつせいに飛ばして競争させるんだよ。もし、レース用のハトならゴムの脚環をつけているはずなんだよ。でも、足のところまで見えないな。」

「どうする？」

ぼくは心配になった。以前、カナリアを飼っていたとき、運悪くにかしてしまい、庭のへいに止まったところをのらネコにおそわれたことを思い出したからだ。

「このままじゃ、死んでしまうかもしれないぞ。」

「なんとかしなくちゃ。」

ぼくは窓を開けようとした。

「あわてるなよ。」

お父さんは、ぼくの肩を後ろからおさえた。

ぼくは、早くハトをつかまえたかった。死んでしまうかもしれないと思ったからだ。

(田辺政美「ぼくらの青空通信」)



ぼくの友だちにも、たいていおじさんがいる。おじさんというのは、つまり両親の兄弟ということで、ぼくたちは、そのおじさんのオイ、女だつたらメイということなのだそうだ。

話をきいてみると、友だちのおじさんは、けっこういいおじさんだという。どこからどこまでいいおじさんというわけにはいかないが、あるおじさんは宿題を教えてくれる。あるおじさんはいっしょに動物園へつれていってくれる。あるおじさんはお小遣いをくれる。

なかにはスポーツマンのおじさんがいて、そのおじさんは有名なスキーの選手なのだそうだ。ジャンプの名手で、全日本大会とかいうと、そのおじさんは一等か、二等か、まかりまちがっても三等になる。一等のときは新聞に写真がでる。三等のときだって、ちゃんと名まえだけはでる。

そういうおじさんを持った友だちは、ほんとうに幸福だとぼくは思う。いっしょにスキー場へ行けば、どんなにか得意だろう。日本一か日本三の選手に、手をとってスキーを教えてもらえるからだ。

けれども、友だちにきくと、実際はそんなことはないそうだ。スキーを教えてくれるなんて、とんでもない。そのおじさんは自分の練習にいそがしくて、オイやメイのことなんかかまっていられないそうだ。

(北杜夫「ぼくのおじさん」)



33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 09 08 07 06 05 04 03 02 01



ジャガイモは、ナスやトマト、ピーマンなど同じナス科の植物です。だからみんな花がにえています。

ところで、植物は近いなかまどうしだと接ぎ木をして育てることができます。接ぎ木とは茎と茎をつなぎあわせる植物の外科手術のことです。

たとえば地上部にトマトの実、地下部にジャガイモのいもをつくることも接ぎ木をすればできます。ジャガイモの茎にトマトを接ぎ木するので、

でも、ぎやくにしてしまつたらどうなるでしょう。トマトの茎にジャガイモを接ぎ木のです。ざんねんながら地上にトマト、地下にジャガイモはできません。

そのかわり、地上部の葉のつけねの枝がふくらんで、そこに小さないもができます。土の中のいもと形や色こそちがいますが、やっぱりいもです。

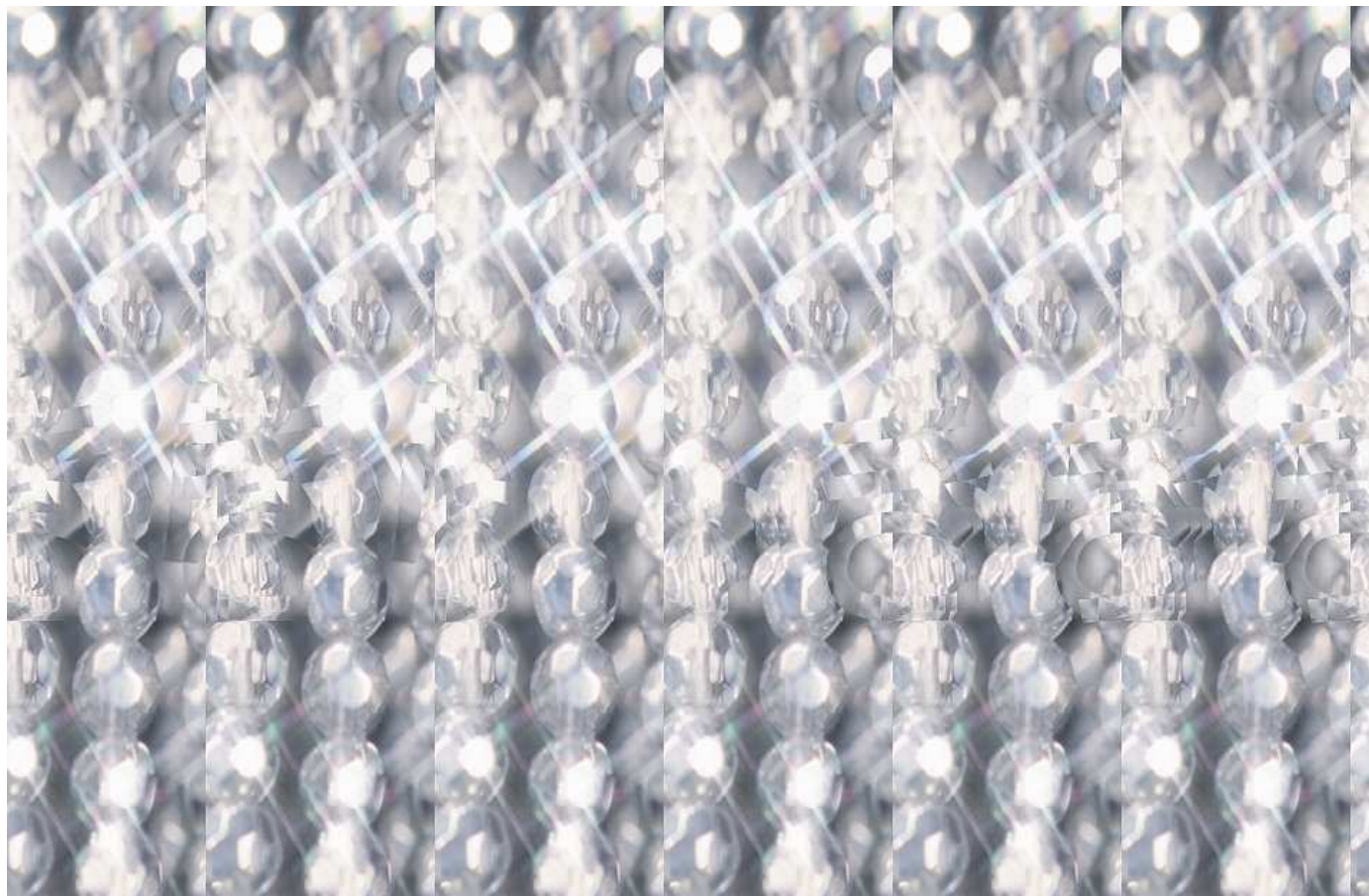
このようにジャガイモは、もともと地下の枝にいもをつくる性質があるの、地上部がほかの植物でも、地下部がジャガイモであれば、地下にいもができます。でも、地下がほかの植物だと、地下に栄養分を送ることができず、かわりに地上部にいもをつくってしまうのです。

接ぎ木をしないジャガイモでも、なんらかの理由で地下に栄養分はこべなくなると、地上部にいもをつくることになります。

（鈴木公治「ジャガイモ」）



33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 09 08 07 06 05 04 03 02 01



秋になると、草や木の実がいつせいに色づきはじめます。色づいたのは、中のたねが、じゅくした合図です。

でも、このような実はそのまま土の上におちても芽ばえません。それは、たねをつつんでいる皮や肉が、芽ばえをとめるはたらきをしているからです。たねを芽ばえさせるためには、まず実の皮や肉をすつかりとりのぞかなければなりません。その役目をしてくれるのが野鳥たちです。

あざやかな色の実をみつめて、野鳥がついばみにきます。このとき鳥は、たねもいつしよにのみこんでしまい、とびさっていきます。

鳥にたべられた草や木の実は、皮や肉が胃の中でとけてしまします。でも、たねだけはかたいからのおかげで消化されずに、ふんといつしよにおとされ、やがてそこで芽ばえるのです。

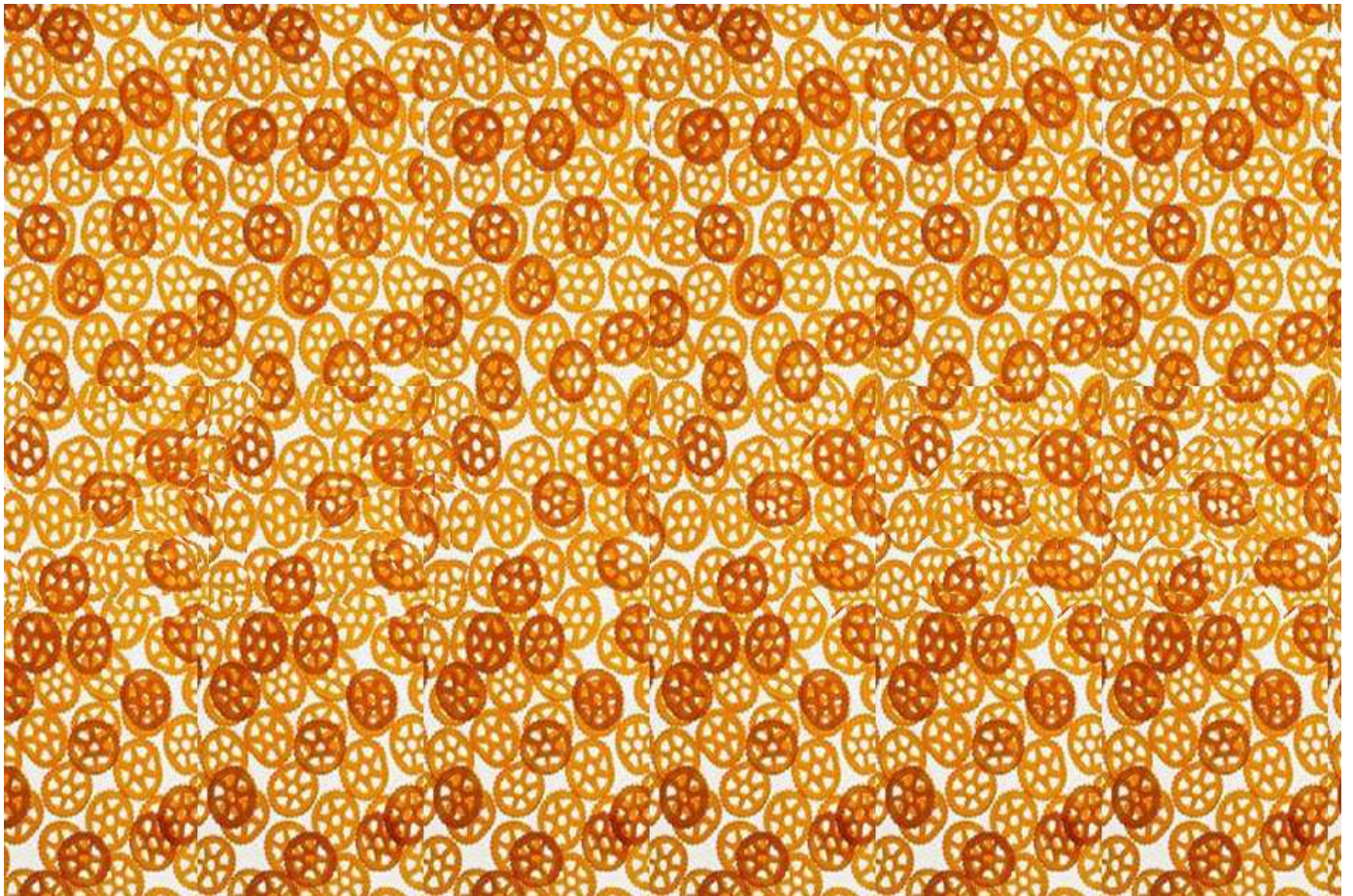
つまり、たねは鳥といつしよに、それだけ遠くまで旅をしたことになるわけです。

エノキやクヌギの木に寄生生活するヤドリギは、秋、まるい実をたくさんつけます。実はとてもねばねばしていて、鳥にたべられても、ねばる力をうしなえません。ふんといつしよにおとされたたねは、木のえだなどにくつついて芽ばえます。

（埴沙萌「たねのゆくえ」）



33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 09 08 07 06 05 04 03 02 01



野鳥観察の第一歩は野鳥を見つけることです。これはあたりまえのことですが、じつはなかなかむずかしいこともあるのです。

きみたちの友だちにも、野鳥好きの人が一人はいるはずです。ちよつと聞いてみてください。「このあたりにはどのような野鳥がすんでいるの？」って。

そこがたとえ大都会でも「スズメ、ムクドリはもちろん、キジバト、ヒヨドリ、ハシブトガラス、カワラヒワ、シジュウカラなど是一年中いるし、そうそう、今年はヒヨドリがうちの庭で巣づくりしたよ」というような答が返ってくるでしょう。

「そんな野鳥知らないや」なんて言わないでください。だれでも一度は見かけているはずですよ。ところが、残念なことに見過ぎてしまったり、気がつかないでいることが多いのです。

どうして見過ごしてしまうのでしょうか。原因の一つは、観察眼がないためです。観察眼というのは、視力が良いとか悪いとかいうことではありません。ものごとを見ぬく力のことです。

探偵小説に登場する名探偵を思い出してください。えらそうにいはる刑事を尻目に、次つぎと証拠をさがし出し、犯人を捕える名探偵のことで。刑事も探偵も同じものを見、聞いていますが、名探偵は刑事にくらべ、より多くのことを発見するのです。この発見する力が観察眼なのです。

（海野和男「自然観察十二カ月」）



33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 09 08 07 06 05 04 03 02 01



カバは、昼間はほとんど、水の中にいます。水の中で、昼寝をした
り、のんびりしたりして、じっとしていることが多いのです。
それで、いつも水の中にいると思われるのですが、カバは、太陽が
しずむころになると、水からでて、陸に上がります。そして夜中に、
えさの草を食べ、朝になって太陽がのぼると、また、川の水の中に、
はいます。

カバの皮膚は、ほかの動物よりも、うすくていてるので、昼間、
陸にいと、からだの中の水分がでていつてしまいます。そのままほ
うつておくと、からだがかわいてしまつて、死んでしまいますから、
なるべく水の中にいるようにしているのです。

また、カバは、体重が二千五百キロから四千キログラムもあるの
で、水の中のほうが、からだがかかるくなり、らくなのです。

カバの目や耳、鼻は、顔の上のほうにあります。そのため、水の中
にいても、目や、耳、鼻のあなだけを、水面からだすことができます。

ですから、水の中にも鼻で呼吸できますし、あやしいものが近
づけば、そのけはいを感じることができます。きけんを感じると、カ
バは、さつともぐります。

水の中にもぐるときは、鼻や耳のあなをとじます。

ひさみけんぞう
(久道健三「科学なぜどうして」)



33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 09 08 07 06 05 04 03 02 01



読解問題 4月4週分

問1 読解マラソン集1番「よく人からこんなことを」を読んで次の問題に答えましょう。
○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

- A 私は、昔は登山が趣味だったが、今は絵を描くことを趣味としている。
B 私がつらい思いをするのは、自分の強さを知りたいからである。
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問2 読解マラソン集1番「よく人からこんなことを」を読んで次の問題に答えましょう。
○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

- A 自分の限界をこえてノックを受けていると、ボールがグローブに吸い込まれてくるときがある。
B 高い山に登れば登るほど、色の数は少なくなり、白と黒の世界が広がる。
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問3 読解マラソン集2番「さて、いろいろな点で」を読んで次の問題に答えましょう。
○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

- A 私は、教授クラスの人が言った「ヘアピン」という答えに疑問を持ったが黙っていた。
B ベドウィンの人々は、ヘアピンをマスカラとしても使っていた。
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問4 読解マラソン集2番「さて、いろいろな点で」を読んで次の問題に答えましょう。
○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

- A 勉強は子供のときで終わりのではなく、大学を卒業してから終わるものである。
B 子供のころに苦しい勉強をしすぎると、大人になっても勉強が楽しくなくなる。
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問5 読解マラソン集3番「私たちは東京に住むと」を読んで次の問題に答えましょう。
○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

- A 現代の工業は、一人の人が一部分しか担当しないので、何かを作ったという体験にならない。
B 工業の仕事をしていると、農業の持つ喜びがだんだん感じられなくなってしまう。
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問6 読解マラソン集3番「私たちは東京に住むと」を読んで次の問題に答えましょう。
○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

- A 工業のシステムに入ると、自分の仕事が地球全体の中で持つ意味がわからなくなってくる。
B 日本の農業は、国民総生産の2%ぐらいだが、経済以外の価値を見ることが大切だ。
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問7 読解マラソン集4番「連日の梅雨空です」を読んで次の問題に答えましょう。
○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

- A 美奈代と菊菜がふりむきもせずに校門にかかったのは、岩田とけんかしていたからである。
B その日は、青空が雲の間からほんの少しだけ見えるような梅雨の一日だった。
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問8 読解マラソン集4番「連日の梅雨空です」を読んで次の問題に答えましょう。
○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

- A 美奈代と菊菜が岩田から声をかけられたのは、校門から出てしばらく歩いたところである。
B 南野先生は、美奈代の担任の先生ではない。
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

読解問題 5月4週分

問1 どっかい 読解マラソン集5番「自由が丘の駅で」じゆう おかを読んで次の問題に答えましょう。
○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

- A かいさつ トットちゃんは、普段から切符が好きで集めていた
B ふだん きっぷ す 改札口のおじさんは、トットちゃんの近所にいるおじさんだった
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問2 どっかい 読解マラソン集5番「自由が丘の駅で」じゆう おかを読んで次の問題に答えましょう。
○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

- A トットちゃんは、切符がほしいといつまでも思っていた
B きっぷ トットちゃんは、切符を売って人になっておじさんを助けてあげたいと思った
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問3 どっかい 読解マラソン集6番「アフリカの緑の森に」あしわを読んで次の問題に答えましょう。
○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

- A ペポネが大きくなるにつれて、ひげのないことがわかってきた
B ほうほう ペポネは、ひげがないことでなまからからかわれた
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問4 どっかい 読解マラソン集6番「アフリカの緑の森に」あしわを読んで次の問題に答えましょう。
○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

- A ほうほう ものしりフクロウは、ひげを生やす方法を知っていた
B ほうほう とうさんヒョウは、ペポネにナマズを食べさせようとした
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問5 どっかい 読解マラソン集7番「ベランダに、一羽のハトが」まっを読んで次の問題に答えましょう。

- と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A まっ 二月末の夕方、もけいひこうき ぼくは、お父さんと模型飛行機を直しているときに、ハトを見つけた
B ひこうき まど ぼくは、飛行機を直しかけのまま、窓からハトを見た
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問6 どっかい 読解マラソン集7番「ベランダに、一羽のハトが」まっを読んで次の問題に答えましょう。

- と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A レース用のハトは、ゴムの脚環あしわをつけている
B ぼくは、ハトがネコにおそわれるかもしれないと思った
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問7 どっかい 読解マラソン集8番「ぼくの友だちにも」わたしを読んで次の問題に答えましょう。

- と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A ぼくが男だった場合、お父さんの妹わたしから見て、ぼくはオイである
B 私が女だった場合、お母さんの兄から見て、私はメイである
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問8 どっかい 読解マラソン集8番「ぼくの友だちにも」わたしを読んで次の問題に答えましょう。

- と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A ぼくから見て、お母さんの妹は、おばさんである
B ぼくから見て、お父さんの兄は、おじさんである
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

読解問題 6月4週分

問1 読解マラソン集9番「ジャガイモは、ナスやトマト、ピーマンなどと」を読んで次の問題に答えましょう。

- と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
- A ジャガイモはナス科の植物で、祖先はナスだった
- B ジャガイモの茎にトマトを接ぐと、ジャガイモもトマトも食べることができる
- 1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問2 読解マラソン集9番「ジャガイモは、ナスやトマト、ピーマンなどと」を読んで次の問題に答えましょう。

- と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
- A トマトの茎にジャガイモを接ぐと、トマトはできない
- B ジャガイモは、地下にイモを作れないと枯れてしまう
- 1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問3 読解マラソン集10番「秋になると、草や木の実が」を読んで次の問題に答えましょう。

- と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
- A 草や木の実の皮や肉には、たねの芽ばえを止める働きがある
- B 野鳥は、たねを残して皮や実を食べてくれる
- 1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問4 読解マラソン集10番「秋になると、草や木の実が」を読んで次の問題に答えましょう。

- と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
- A 野鳥の胃の中で、たねはとかされ、ふんといっしょに地上におとされる
- B ヤドリギは、ねばりがあるので、野鳥の口にくっついて旅行をする
- 1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問5 読解マラソン集11番「野鳥観察の第一歩は」を読んで次の問題に答えましょう。

- と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
- A 多くの人は、野鳥を見ているが気がつかないだけだ
- B 本当は野鳥を見ているのに、それに気づかない人は観察眼がない
- 1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問6 読解マラソン集11番「野鳥観察の第一歩は」を読んで次の問題に答えましょう。

- と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
- A 観察眼をよくするためには、視力もよくする必要がある
- B 名探偵は、視力がよいので、同じものを見てもより多くのことを発見する
- 1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問7 読解マラソン集12番「カバは、昼間はほとんどを」を読んで次の問題に答えましょう。

- と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
- A カバは、夜は陸に上がり、昼は水の中にいる
- B カバの皮膚はうすいので、敵に襲われないように昼は陸に上がらない
- 1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問8 読解マラソン集12番「カバは、昼間はほとんどを」を読んで次の問題に答えましょう。

- と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
- A カバは、体が重いので、水中にいた方が楽だ
- B カバは、鼻や耳の穴をとじることができる
- 1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

4 ~ 6月

小1 コード： nane パ ス：	小2 コード： nane パ ス：	小3 コード： nane パ ス：
小4 コード： nane パ ス：	小5 コード： nane パ ス：	小6 コード： nane パ ス：
中1 コード： nane パ ス：	中2 コード： nane パ ス：	中3 コード： nane パ ス：
高1 コード： nane パ ス：	高2 コード： nane パ ス：	高3 コード： nane パ ス：

1 ~ 3 月

小1 コード：nane パ ス： PDF	小2 コード：nane パ ス： PDF	小3 コード：nane パ ス： PDF
小4 コード：nane パ ス： PDF	小5 コード：nane パ ス： PDF	小6 コード：nane パ ス： PDF
中1 コード：nane パ ス： PDF	中2 コード：nane パ ス： PDF	中3 コード：nane パ ス： PDF
高1 コード：nane パ ス： PDF	高2 コード：nane パ ス： PDF	高3 コード：nane パ ス： PDF